

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02508

研究課題名(和文) 東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究

研究課題名(英文) A descriptive and dynamic study of contacts and mixture with European languages in East-Asian communities

研究代表者

黒沢 直俊 (Kurosawa, Naotoshi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80195586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：東南アジア地域での欧州語との接触や混成現象を対象にベトナム語、マレーシア英語、チャバカノ語、クリスタン語を取り上げ、記述研究や言語文化保存と継承などを調査した。ベトナム語におけるフランス語のレガシーに関しベトナム本国とアメリカ合衆国のベトナム人コミュニティを調査しフランス語起源語の世代間の受容差や、フィリピンのスペイン語クレオール語のチャバカナ語の自然会話録音を行い、分析した。マレーシア英語の調査やマレーシアのポルトガル語クレオールのコーパス構築、マカオのポルトガル語クレオールのパトゥワ語についての研究協力も行った。将来的な展開の土台を形成することが出来、成果はすべてWEBを通じて公開した。

研究成果の概要(英文)：We studied the contacts with European languages and the mixed varieties in the Southeast Asian region, taking Vietnamese, Malaysian English, Chabacano and Kristang in order to investigate, besides the description, the linguistic and cultural preservation and transmission in the community. For the legacy of French language in Vietnamese, we have done field investigation in Vietnam and in a Vietnamese community of the United States of America and have reached some conclusion about the different acceptance of French words between the generations. We also analysed the recording of natural conversation in Chabacano, Spanish Creole of the Philippines, besides a study about Malaysian English, a trial construction of the linguistic corpus of a Portuguese Creole of Malaysia and the research partnership about a Patois language in Macao, another Portuguese Creole. We succeed in making the foundation of prospective development in this field and we published all the results through Web pages.

研究分野：ロマンス言語学

キーワード：言語接触 ポルトガル語クレオール スペイン語クレオール 危機言語 言語的レガシー 少数言語  
クリスタン語 チャバカノ語

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 少数言語の記述研究：研究代表者の黒澤と分担者の富盛は東京外国語大学学内共同利用施設である「語学研究所」をひとつの拠点として1990年代から本課題に関連のある少数言語文化の継承について研究グループを組織し、特にロマンス語系言語（スイス・イタリア・アルプス地域のラディン語、ロマンシュ語、フリウリ語、またイベリア半島のガリシア語、アストゥリアス語、ミランダ語など）では、歴史的記述に社会言語学的視点を加えた研究活動を開始していた。その成果は語学研究所の刊行物をはじめ活発な発信を行ってきた。この研究は上の成果と組織を活用している。

(2) 地域言語の形成と接触・混成現象の研究：平行して学外の研究組織では「日本ロマンス語学会」で代表者、分担者ともに専門研究領域であるロマンス語系言語の記述研究にあたり、関連する分野で言語接触、クレオール研究、言語文化の社会言語学的分析などの研究発表を行ってきた。分担者・協力者の萩原との共同研究はこの学会活動から生まれ、フィリピン島嶼地域における先住民少数言語のクレオール化現象の社会言語学的研究を含む本研究課題の企画の実現が可能となった。

(3) 国家語の歴史的形成と言語教育研究からの視点：いわゆる国家標準語の教育と地域言語の相克問題からの示唆も大きく、代表者・分担者が参加する「外国語教育学会」では国家語のみならず少数言語を含む言語教育政策に関わる研究活動を推進しており、分担者の富盛による母語としてのロマンシュ語教育とヨーロッパにおける早期外国語教育の研究、また、ベトナム語・ベトナム語教育、ベトナムの少数言語研究を専門とする分担者の田原は他にフランス語及びロシア語との接触地域の干渉現象の研究を研究課題としてきた。

(4) アジア地域をまたがる言語文化的継承現象の記述研究：分担者の富盛は2011年12月に東京外国語大学において少数言語の研究と教育に関する国際シンポジウム「蒙州における先住民語教育と日本の少数言語教育」を企画し、オーストラリアのノーザンテリトリーからアボリジニー語の話者6名を含む海外研究者を招聘し研究交流を行った。加えて、アイヌ語、マリ語などの研究者・教育者からも危機言語の社会言語学的分析を踏まえた言語文化の継承の問題が論じられ、貴重な研究交流の成果を得た。さらに、2013年3月には国際シンポジウム「外国語教育と異文化間教育」を企画開催し、言語教育と文化コミュニケーション能力の教育について理論的な議論を深めた。特に、本課題研究の構想は、パネリストのマレーシア・マラッカからKristang語の言語運動家・伝承者であるJoan Marbeck女史を中心に、マカオ大学からMario Nunes教授、ブラジルからPierre Guisan教授らとの交流から生まれた。ポルトガル語との接触により生じた各地の混成言語の記述研究、言語の保存復興、文化的アイデンティティーの継承の研究が急務であること、世界的にも研究者が少なく日

本からの寄与を期待しているという問題提起は本プロジェクトの企画につながった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第1に、東南アジア諸語地域において数世紀にわたる、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、英語等ヨーロッパ系言語と基層言語との接触や混成現象を経て形成された言語変異の個々の記述研究を通して、この言語域に特有な歴史的变化の特質を把握することである。第2に、東南アジア諸語のなかでも顕著な様相を示す地域をとりあげ、言語文化的継承に関わる問題を分析することにより、理論的にはアジア諸語に限らない世界各地の少数者言語地域に適用しうる包括的社会言語学的知見を得ることである。第3に、特に東南アジアの少数言語地域に強く見られる言語文化保存・継承と少数言語教育の試みを臨地調査し、現地の当事者との協働により、危機的状況にある言語に有効に働きうる人為的・環境的要件を抽出する。以上の課題を有機的に関連付けて動的に解析し、その成果を国内外の研究集会やWeb上で一般社会に還元する。

## 3. 研究の方法

(1) 以下の2つのテーマに関し、共同して計画を遂行する：

テーマA(東アジア諸国における言語接触・混成現象に関する研究)；  
 テーマB(東アジア語圏の言語文化の継承研究と社会言語学的理論化の研究)

(2) 基礎的現地調査の実施：必要に応じ現地研究協力者を得ながら、研究連携関係諸国の大学等に研究参加者を派遣し、言語接触や混成現象に関するデータ収集と臨地調査を行う。

(3) 干渉現象の分析に必要となる、対象地域のインフォーマントにアンケート調査を行い、特にKristangの場合には話し言葉コーパス構築のための準備作業や口語データの収集を行う。

(4) 研究成果発信のため研究連携大学や研究代表者の所属する大学を中心に国際あるいは国内の研究集会を開催し、成果をWebや刊行物等を通し学術的かつ社会的に還元する。

## 4. 研究成果

(1) ベトナム語におけるフランス語のレガシィ(田原洋樹担当)：ベトナム語には、比較言語学上で語族が異なるフランス語を起源とする語彙群があり、その数は、フランス植民地時代に入ってきた語、さらにはフランスからの独立後に取り込んだ科学技術語彙などおおむね1000語と考えられている。本研究では、戦中戦後の社会変化や世界「英語化」の流れを考慮しつつ、フランス語起源語について考察した。

ベトナム語の語彙には漢越語とフランス語起源語がある。前者は từ Hán Việt と呼ばれる、漢語に起源を持つ語で、政治経済および社会科学に関する語彙のおおよそ6割を占める。他方で、フランス語に起源を持つ語は từ gốc Pháp と総称され、フランス植民地時代に

持ち込まれたフランス語がそのまま、あるいはベトナム語化されて定着した語である。しかし、近年、フランス語起源語はベトナム人の若者には「通じない」ことがあり、純粋ベトナム語への置き換えが進んでいると推察される。他方で、ベトナム国内、とりわけ南部の壮年や老人（サイゴン陥落以前に出生し、旧ベトナム共和国で成長した者）や、アメリカ合衆国カリフォルニア州の「リトルサイゴン」と呼ばれる地区のベトナム系住民のコミュニケーションでは引き続き多くのフランス語起源語が使用されている。研究では、日常生活で用いるフランス語起源語や1975年以前には一般的に使用され、現在は使用されていない語をリストアップし、フランス語起源語が与える印象などをベトナム本国やアメリカ合衆国での現地調査を通じてさまざまな方法で検証、考察した。その結果、使われていない語群には「そのものがなくなった」名詞が多く、さらにその消失の理由は技術革新と戦争およびその後の社会変化を推定することができる。戦争を含めて社会変化によって消失した語と、ベトナム語に同義語があり、かつフランス語起源語よりもベトナム語が好まれる語に関しては、純粋ベトナム語への置き換えを奨励する言語政策も関係している。意識的に会話にフランス語起源語が好まれていく領域の語を盛りこむと、60代の国内在住女性には懐古趣味だと指摘され、30代の国内在住女性からは「老人と話しているみたいだ」との感想を得たという。

このように、フランス語に起源を持つ語は科学技術分野の専門用語のみならず、ベトナム人の日常生活において欠かすことができない基本語彙として溶け込んでいる。純粋ベトナム語への置き換えができない語や、多くのベトナム人がフランス語起源語だと気づかずに使っている語もあり、その定着度の深さもうかがえる。他方、フランス語起源語を意図的に多用する行為には、御洒落やハイカラな印象を与えるのみならず、自分がフランス語に明るい中流ないし上流社会に属する人間であることをさりげなくアピールする意味合いもあり、往時のサイゴンの言語動態を考える上で興味深い。

(2) チャバカノ語調査とフィリピンにおける言語状況（荻原寛担当）

フィリピンは、国語としてのタガログ語と、学校教育を受けていれば習熟度の差はあっても英語とのいわゆるバイリンガルであり、さらに、非タガログ語地域では、現地の土着言語が加わった、トライリンガル以上の多言語使用状況が普通である。本研究では、特に、この第3極に属するスペイン語クレオール言語のチャバカノ語の変種であるカビテ語とテルナテ語について現地調査を行い、採取された自然会話データを分析しただけでなく、英語とタガログ語の間に生じる混成言語であるタグリッシュについても考察を加えた。

英語とタガログ語のバイリンガリズムのシステムが完全に機能するためには、英語での意思疎通がほぼ完璧であることが前提になる。しかし、習熟程度は一定ではないので、そうした中でタグリッシュ Taglish というタガログ語 Tagalog と英語 English が混ざり合っ

た言語形式が生まれた。最初は、教育を受けた人々が自然科学用語として造語されたフィリピン語（タガログ語）は使い勝手が悪いとして、フィリピン語の学術的な文脈に、使い慣れた英語語彙を単純に挿入していたものが、バイリンガル教育方針の決定を契機に、ラジオやテレビを通じて民衆の間に急速に広まった。名称も当初は「まぜこぜ」を意味する halo-halo だったのが、Engalog を経て Taglish となった。英語を主としてタガログ語を混ぜるタイプと、タガログ語を主として英語を混ぜるタイプの2つに大別されるが、クレオールのように2つの言語の文法体系のうち最も複雑な部分を互いに簡略化し、一方の言語を母体（基層）に、他方の言語は語彙を供給する lexifier（上層）にして融合し、叙述部を中心に新たな文法体系を生み出すのではなく、英語とタガログ語の間で行われるコード・スイッチングにより生じる、その場限りの言語形式である。しかし、タグリッシュと英語の併存状況が続いているのは、英語習熟度の低い学習者への補助言語としての役割があるのと、タグリッシュの使用が与える親近感であるという。

2016年2月、同年5月、同年10月の3回に分けて、カビテ市とテルナテで、英語がどの程度チャバカノ語に影響を与えているかの調査を行った。第1回目は他の研究テーマによる以前の現地調査から17年の歳月が経っていたため、調査協力者へのコンタクトの再構築にほとんどの時間を割かなければならず、本格的な調査は第2回目と第3回目で行った。対象者および収録時間の少なさを勘案しても、カビテ語はテルナテ語に比べて圧倒的に英語の影響が少なく、英語の混在も名詞に限られているのは、テルナテ語のほうが存続の危機が薄いこと、すなわち小さな閉鎖的な町で外部の人間と接する機会がカビテ市に比べて少ないだけでなく、対象者たちがテルナテ語をアイデンティティーとして強く意識し、強固な保護運動グループを結成していることに関係している可能性もあながち否定できない。一方、カビテ市は市庁所在地であり、マニラ首都圏とマニラ湾を隔てて互いに遠望できる距離にあり、住民もタガログ語話者がほとんどである。そのため、言語環境はマニラ市内とほぼ変わらず、その分、英語やタグリッシュに接する機会が多い。このことから様々なパターンの混在が見られた可能性が高いことなどが研究から明らかになった。

(3) アジアにおけるポルトガル語とその文化継承 Kristang 語（富盛伸夫担当）

本研究ではアジアに渡来し定着したポルトガル人たちの残した Heritage と Legacy について、マレーシア・マラッカ地域に現在まで伝えられる Kristang 語とその周辺についてケーススタディーとして研究した。マラッカの人々が自分の使用する言語に対する名称は多様で、最も一般的な語は Kristang で、ポルトガル語 «Cristão» に由来するといわれる。これに対して、«Portugues di Melaka»（英：Malacca Portuguese）「マラッカのポルトガル語」というフラットな表現も使われる。ただし、本国からの言語規範が強く働いてこなかったため、ポルトガル語の変種である、と言

うにはマレー語や中国語からの影響が顕著である。他に、「Linggu Mai」(Mother Tongue)「母なる言葉」や、Papia(「話す」)を付けて「Papia Kristang」あるいは、マレー語(bahasa Melayu)の「言語」を付けて、「Bahasa Serani」などの呼び方がある。Bahasa Gerago「エビコトバ」という表現が用いられることもあるが、エビ漁で生計を立ててきたポルトガル系 Eurasian の人々の話す言葉ほどの意味だろう。話者自身は単に Portugis「ポルトガル(系)語」ということが多い。研究では、ユネスコなどの危機言語に関する扱いなどを参考に、マカオで伝承されているパトワ語などとともに、ポルトガル本国との関係、言語人口、話者世代、他言語との接触、使用地域、言語の生命力、規範性、言語リーダー、言語的求心力、研究状況、文化活動、料理の伝統、公的援助、言語教育、保存・継承活動、などの点から考察された。

(4) マレーシア英語、クリスタン語コーパスデータベースの構築、少数言語の調査(野元裕樹、黒澤直俊担当)

研究ではマレーシア英語についてはマレー語の統語論や形態論などとの関係で研究が行われた。マレーシアのポルトガル語クレオールである Kristang 語については、すでに印刷された資料などを中心に電子化し、コーパスを構築し始めている。この手法は、研究代表者の黒澤がポルトガル国境地域の、すでにほぼ絶滅状態にあるアストゥリアス・レオン諸語のリオノール語に対して行った研究方法を援用している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計18件)

- ① 黒澤直俊, ポルトガル語と標準語, 日本語学, 査読無, 37-5, 明治書院, 2018年, pp.110-126
- ② 黒澤直俊, アストゥリアス語口語コーパスとその分析, ロマンズ語研究, 査読有, 50号, 2017年, pp.67-76
- ③ 田原洋樹, ベトナム語におけるフランス語のレガシィ, APU 言語教育論叢, 2, 査読無, 2017年, pp.10-17
- ④ Nomoto, Hiroki, Sintaksis nominalisasi bahasa Melayu, Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu, 1, 2017年, pp.71-117
- ⑤ Kartini Abd. Wahab, Hiroki Nomoto, Konstruksi penaikan dan kawalan dalam bahasa Melayu, Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu, 1, 査読無, 2017年, pp.118-144
- ⑥ Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi, Hideo Sawada, TUFs Asian Language Parallel Corpus, 1, 言語処理学会第24回年次大会 発表論文集, 査読有, 2018年, pp.436-439
- ⑦ 黒澤直俊, 多極化・多元化するルゾフォニア, 言葉から社会を考える, 査読無, 2016

年, 白水社, pp.95-98

⑧ Nomoto Hiroki, Passives and clitic doubling: A view from Classical Malay, AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association, 査読無, 2016年, pp.179-193

⑨ 野元裕樹, マレーシア語の焦点表現と名詞述語文, 語学研究所論集, 査読有, 21, 2016年, pp.171-189

⑩ 富盛伸夫, Yi Yeong-il, アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力について, 外国語教育研究, 査読有, 19, 2016年, pp.1-18

⑪ 富盛伸夫, ロマンシュ語, 言葉とその周辺をきわめる -その4-, 査読無, 2016年, pp.1-22

⑫ 荻原寛, タガログ語、タグリッシュ、英語そしてチャバカノ語 カオスの中のアイデンティティ, 東京外国語大学語学研究所ホームページ, 査読無, 2017年

⑬ 黒澤直俊, ポルトガル国内におけるアストゥリアス・レオン語 - リオドノール語の文法形態再建の試み, 東京外国語大学論集, 査読無, 90, 2015, pp.131-151

⑭ Nomoto, Hiroki, Decomposing Malay anaphoric expressions, Proceedings of the Twenty-First Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA), Canberra: Asia-Pacific Linguistics, 査読無, 1, 2016, pp.219 - 236

⑮ 野元裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー, マレーシア語の連用修飾的複文, 語学研究所論集, 査読有, 東京外国語大学語学研究所, 20, 2015, pp.253 - 276

[学会発表](計23件)

① Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi, Hideo Sawada, TUFs Asian Language Parallel Corpus (TALPCo), 言語処理学会 第24回, 2018年

② 黒澤直俊, アストゥリアス語の口語コーパスとその分析, 日本ロマンズ語学会, 2016年05月21日~2016年05月22日, 福岡県, 福岡市, 九州大学

③ Nomoto, Hiroki and Kartini Abd. Wahab, Tipe pasif di-pada teks klasik Melayu, Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIIMLI) (国際学会), 2016年08月24日~2016年08月24日, インドネシア、ウダヤナ大学

④ Nomoto, Hiroki, Towards a proper description of vowel lowering in Malay, The 18th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL) (国際学会), 2016年07月14日~2016年07月14日, オーストラリア、メルボルン大学

⑤ Nomoto, Hiroki, Passives and clitic-doubling: A view from Classical Malay, The 23rd Annual

Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA) (国際学会), 2016年06月10日~2016年06月10日, 東京都, 府中市, 東京外国語大学

⑥ 富盛伸夫, Yi Yeong-il, Tufs 言語モジュールの会話文を活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化, 外国語教育学会, 2016年12月18日~2016年12月18日, 東京都, 府中市, 東京外国語大学

⑦ 富盛伸夫, 李迎日, Trends in CEFR Self Assessments by Native Speakers and learners of Asian Languages and issues concerning Proficiency Descriptors - A 2014 Learner Survey-based Study, 国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」(国際学会), 2015年08月01日, 東京外国語大学

⑧ 富盛伸夫, 李迎日, アジア諸語学習者における言語別 CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力の測定に関する諸問題 - 学習者アンケート調査 (2014) の分析から - , 外国語教育学会, 2015年11月29日, 東京外国語大学

⑨ 野元裕樹, The development of the passive in Balinese, The Fifth International Symposium on the Languages of Java (ISLOJ) (国際学会), 2015年06月06日~2015年06月07日, インドネシア教育大学 (インドネシア)

⑩ 野元裕樹, A comparative study of the development of the passive in Balinese and Malay, The 10th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL) (国際学会), 2015年06月13日~2015年06月14日, 東京外国語大学

〔図書〕(計2件)

① Nomoto, Hiroki, Takuya Miyauchi and Asako Shiohara, AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association, Asia-Pacific Linguistics, Canberra, 2016, 302pp.

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0009/project.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

黒沢 直俊 (KUROSAWA, Naotoshi)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号: 80195586

### (2) 研究分担者

野元 裕樹 (NOMOTO, Hiroki)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授  
研究者番号: 10589245

荻原 寛 (OGIWARA, Yutaka)  
長崎県立大学・経済学部・教授  
研究者番号: 20233447  
(平成27年度~平成28年度)

富盛 伸夫 (TOMIMORI, Nobuo)  
東京外国語大学・名誉教授  
研究者番号: 50122643

田原 洋樹 (TAHARA, Hiroki)  
立命館アジア太平洋大学・准教授  
研究者番号: 60331138

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号:

### (4) 研究協力者

荻原 寛 (OGIWARA, Yutaka)  
長崎県立大学・名誉教授  
(平成29年度のみ)